

Title	貨幣数量説と貨幣本質観との論理的関係
Sub Title	
Author	萩原, 吉太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.1 (1931. 1) ,p.51- 101
JaLC DOI	10.14991/001.19310101-0051
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310101-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新耕作法は資本の抛下と企業的經營とを要するものにして、小農民は到底之れと
韻頑することを得ざりき。圍繞法の法律上、其の他の費用圍墻、其の他の經費は郷
士及び其の他の小地主の多くを凋落せしめたり。價格動搖の世界に於ける市場
生産も亦、彼れ等の資力と知力とに適せざるものなりき。此の階級の多くも亦、其
の獨立の地位を維持すること能はずして、都市に於ける新興工業に其の身を投ず
るに至れり。工場制工業及び大規模生産の發達によりて生じたる家内工業の衰
頹は亦、小農民より其の副業の多くを奪へり。斯くの如くして土地所有權及び借
地權の安全を奪はれたる地方人口は實に近世的資本主義の要求せる自由無産勞
働階級なりき。爰に地方農民の都市産業軍補充は始まる。而して資本的企業の
世界は又、經濟的恐慌及び不景氣の殆んど週期的に襲來する世界と爲せり。是れ
に由つて又、新たななる失業群は産出せしめられざるを得ず。爰に解雇による賃銀
労働者の仕事の停止並びに他に業務を看出すの困難より生ずる現代の失業問題
は生ぜざるを得ず。而して吾人は爰に又、新たななる労働權の提唱を見ずんば己ま
ざるなり。

(昭和五年十二月稿)。

貨幣數量説と貨幣本質觀との論理的關係

萩原吉太郎

序論

本稿の要旨

第一節

定義

分類

第二節

需要供給の法則と素材價值學説

需要供給の法則と機械的數量説と生産費説

第三節

機械的數量説と倣徵主義

機械的數量説と職能價值學説

第四節

貨幣數量説と主觀的貨幣價值學説

第五節

機械的數量説と指圖學説

序論

本稿の主眼とする所は貨幣數量説と貨幣本質觀との論理的關係の研究である。換言すれば貨幣數量説の基礎附けとして如何なる貨幣本質觀又は貨幣價值本質觀が合理的であるかを考究せんとするものである。

貨幣數量説は機械的數量説と需要供給の法則との二類型に大別することが出来る。前者は流通現象的なる立場より社會内に活動する個人に遡ることなく、純客觀的に物價平準變動の理法を説かんとするものである。反之、後者は物價平準變動の理法を社會内に活動する個人を通して説かんとするものである。若し後者が全然個人的評價作用の心理的經過を問題とすれば、そはむしろ主觀的貨幣價值論と呼ばれるべきであるが、そは直接には流通場裡に於ける貨幣總量又は貨物總量なる客觀的事實を取扱ふが故に貨幣數量説と稱せられるのである。しかも其の根本的態度はかゝる客觀的事實も社會に活動する各個人の主觀的なる心理的經過を通して展開さるゝとなすが故に、前者が全然客觀的なるに對して後者は根本的には主觀的である。換言すれば前者は主觀的感情としての價值から客觀的なる數的表現への展開を否定するに反し、後者は其の可能を肯定するものである。

かゝる根本的精神の相違の存するにもかゝらず、兩者は一國に於ける貨幣總量と貨物總量との必然的相等性を前提とし、其の上に其の全議論を打建つるものである。従つて貨幣貨物總量の必然的相等性の論據を示すことは貨幣數量説の基礎附けをなすこととなる。しかも此の問題は未だ解決せられざる宿題である。

此の問題に答へんとすれば、第一に貨幣數量説と其の解明せんとする貨幣價值の本質性に關する見解との論理的關係を究明せねばならない。貨幣價值本質觀は三學派に岐れてゐる。即ち貨幣素材價值學説と貨幣職能價值學説と指圖學説とである。貨幣素材價值學説は貨幣價值を其の素材の價值に求むるものなるが故に、貨幣充用以外の貴金屬を問題とせず、鑄貨以外の貨幣をも貨幣數量中に加ふる數量説と論理上相容れざるものである。次に職能價值學説は貨幣價值を其の效用と稀少性に由来せしめ、其の效用は其の職能のうち認めらるるものである。彼等の觀る貨幣價值は一般財貨の經濟價值と同一範疇に屬するものである。此の故にそは前者と共に商品學説とも呼ばれる。従つて職能價值學説の貨幣價值は主觀的なる價值感情から出發するものなるが故に、數量説のうち需要供給の法則と其の立場を同うするものである。従つて其の基礎附けとなすに個人的評價作用の心理的經過を以つてするは當然の歸結である。然るに若し職能價值學説論者が機械的數量説を採用する時は如何なる結果を生ずるか。貨幣價值の本質を主觀的なる價值感情から説く論者が貨幣價值の變動の理法を全然客觀的事實から説かんとするものなるが故に、數量説の基礎附けを需要供給の法則の場合と同じく主觀的なる評價作用の心理的經過を以つてするに至るのである。斯る基礎附けは主觀的狀

態より客觀的表現への展開、又は主觀と客觀との相互的作用を認諾するの前提の下に行はるゝものにして、従つて機械的數量説の純客觀的なる特徴は失はれざるを得ない。

然るに機械的數量説は指圖學説と結合し、これにより基礎付けらるゝ時は、其の客觀的なる立場を保持しつゝ、其の論理的根據を獲得するものである。指圖學説の經濟の組織に関する共同經濟の概念、經濟の對象に関する社會生産物の概念、交換と賣買とを區別し貨幣を以つて評價の對象たらずとなす見解は機械的數量説の客觀的見地を説明し、貨幣の本質的職能を財貨一般に對する指圖權なりとなす見解は貨幣總量と貨物總量との必然的相等性の論據を説明するものである。

洵に貨幣數量説は其の歴史の餘りに長さとその命題の餘りに簡單なるが爲めに、通俗的常識的學説としての印象を與ふるものなれども、上述の如く夫と貨幣價值本質觀との論理的關係を考究し、これに新たな基礎付けを與ふる時、それは依然として貨幣價值論の中心的學説として幾多の示唆に富む研究對象たるを失はざるものなりとの感を深めざるを得ない。吾人は以下上述の諸點を第二節に於てはリカードオ、ミルの素材價值論者、第三節第四節に於てはモンテスキュー、ジンメル並びにウイザー、ミイゼズの職能價值論者、第五節に於てはエルスター、シュンペーターの指圖學説論者を中心として論述したいと思ふ。

第一節

貨幣數量説は貨幣價值論上古き歴史を有し、現今最も一般的なる學説となつてゐるが、其の正體に至りては甚だ曖昧にして、論者により屢々其の内容を異にしてゐる。ホフマンが數量説論者の主

張は各々特色を帶ぶるを以て、これを適當に分類し、又はこれを適當なる典型として理解するは困難であると言つたのは尤もである(註一)。若しも數量説なる名辭の創造者が其の内容を明示してゐたなれば、斯説に伴ふ曖昧は少なからず免かれたのであらうが、其の命名者すら不明なる状態である。ワグマンはワグナーが其の著「ピール銀行法に於ける貨幣及び信用學説」(一八六二年)に於て此の名辭を初めて使用したと斷言してゐるが未だ學界で認められてゐない(註二)。

貨幣數量説なる名辭の下に一括せられたる各様の學説のすべてを包含したる定義を下さうとすれば、勢ひ甚だ廣汎なる定義を探るの外はない。アルトマンの「所謂貨幣數量説とは貨幣の増加は物價を騰貴せしめ、その減少は物價を下落せしむると云ふ如く、貨幣數量と物價との間に密接なる關係を認むる汎ゆる物價或は貨幣理論である」(註三)となすが如きそれである。キルマイヤも亦、「若しも因果關係に関する個々の解釋の特長を度外視すれば、數量説なる名辭は貨幣數量と所謂貨幣價值換言すれば物價との關係を貨幣増加は一般に物價を騰貴せしめ、貨幣減少は一般に物價を下落せしむると云ふ工合に主張する汎ゆる學説の綜合的觀念を意味するものとなすことが出来る。而してかゝる定義は今日數量説と呼ばれる、凡ての學説を包含するが故に、學術的用語に適ふものである」(註四)と言つてゐる。

今、上述の如き廣義の解釋を採用する時は、問題となるのは其の包含するところの各様の學説を如何に分類すべきかである。斯説の内容を明確にしやうとすれば、適當なる分類を行ひ、其の分類せられたる各類型の比較研究を試むるの外はない。キルマイヤは斯説を分類して、貨幣數量と價格

との間の機械的關係を主張するものと、兩者の比例的關係を認むるものと、貨幣數量の外に貨幣の流通速度をば物價に對する影響に加ふるものと、貨幣量と財貨との關係を數式的方程式の形式に導きこれより價格構成又は貨幣價值變動の鍵を得んとするものとなし、第一を單純數量説、第二を比例學説、第三を修正數量説、第四を所謂交換方程式と唱へた(註五)。第一と第二との相違は結論に於て貨幣數量の増減が正比例的に物價平準の騰落を招來するとなすか、又は單に傾向的であるとすかに存する。多くの學者は比例學説のみに貨幣數量説なる名辭を局限するも、其の理由となすところを見るに唯單に數量説が漠然たる爲め幾分特徴を備へたる比例學説に局限せんとするに過ぎない。單にこれだけの理由の下に數量説を比例學説のみに局限するは甚だ亂暴なる獨斷にして、其の前に第一の類型と第二の類型との相違の生ずる所以を明確にしなければならぬ。而して第一の類型と第二の類型との間に存する相違は各々の理論から生ずる必然的なる論理的歸結である。然りとすれば兩者は其の結論に従つて分類するよりも、其の理論的構造に従つて分類する方が寧ろ適切であらう。第三の類型は貨幣數量説の含む概念の修正精鍊にして、預金貨幣を加へたる貨幣數量説を指して新貨幣數量説と呼ぶ分類と其の軌を一にするものにして、決して根本的分類とは稱せられない。更に第四の分類に至つては單なる學說表現の形態の變化に過ぎないのである。かゝる分類方法を以つてして斯説に伴ふ曖昧を除去することは不可能である。貨幣數量説は其の觀察の見地に於て二個の對立する潮流を認めることが出来る。其の一は社會内に活動する個人を通して物價變動の理法を説かんとするものにして、他の一は社會に現れたる結果を流通現象として觀察し、其の内に活動する個人に何等觸るゝ所なく物價變動の理法を説明せんとするものである。前者に屬するものはリカード、オ、セイ、ジョン・ステュアート・ミルの流れを汲む一派にして、貨物に關する需要供給の法則を貨物に適用せんとするものにして、又ウイザーの所得説もこの類型に加へらるべきものである。後者に屬するものはロック、ヒューム、モンテスキューよりジンメル、フィッシャー、バーカー等に至る一派にして、シンペーターの所得説も此の類型に加へらるべきものにして、一國內に於ける貨幣全量と貨物全量との相等性を根基とするものである。

此の觀察の見地の相違の結果として、前者は個別價格の變動を物價平準の變動に先立たしめ、貨幣數量の増減は先づ個別價格に影響を及し、その綜合平均の結果として物價平準の變動を來すとなし、後者は物價平準は個別價格より獨立して變動するものなりと説く。例へばミル曰く「他の事情同一なりとして貨幣數量が増加する時、例へば金銀を所持する一外人が或る場所に來り其の所持する所の金銀を費消する時、貨幣の供給は増加し、同時に同一の行爲により貨物に對する需要が増加する。勿論最初は彼の購入せる貨物の需要のみを増加し騰貴せしむるであらう。彼個人に關する限り此の貨物のみを騰貴せしむるであらう。——乍併、價格騰貴のため従前より多額の貨幣が其の賣却者の手へ渡るであらう。勞働者たる商人たるを問はず多くの貨幣を有するに至れば、從來購入せるところの貨物に對する需要を増加すべく、従つて其の貨物は騰貴すべく、斯くて遂に一般物價が騰貴するであらう」と(註六)。之に對し第二の類型に屬するフィッシャーは曰く「砂糖と弗との間に存する意義は根底に於て砂糖と弗の購買するものとの間の平衡である。弗の購買するものゝ高の變化

は砂糖の高的變化と同様に重要である。弗に於ける砂糖の價格は砂糖と弗、即ち弗の購買するもの、即ち物價平準とに依頼する。故に砂糖の個別價格の下には其の基礎として一般物價が横つてゐる。物價平準研究の準備として個別價格を研究するよりも、個別價格研究の準備として物價平準を研究するの必要がある(註七)。「物價平準は個別價格より獨立して研究せらるべき事を明白に認めねばならない」と(註八)。

此の第一の類型の主潮たる需要供給の法則と第二の類型の機械的數量説とは如何なる關係に立つか。兩者は絶対に相容れざるものなるか。或は又兩者は融合し得るものなるか。一部の論者は需要供給の法則は經過を説くもの、機械的數量説は同時的成立關係を説くものにして、前者は後者の基礎をなすと説く。然れ共需要供給の法則は其の觀察の根本精神は主觀的なるも、其の直接の觀察の對象は客觀的なる市場價格にして、其の構造の出來上りは外見上第二の類型と全く同一にして、個人の評價作用の心理的經過に就いては何等説明せざるものである。故に第二の類型の基礎付けとしての需要供給の法則は更に夫自身の基礎付けを要求するものである。

貨幣數量説に對する基礎付けとしての一は主觀的貨幣價值學説にして、ウイザーの所得説、ミイゼズの限界効用説の如き夫れである。そは個人の評價作用より出發せんとするものにして、需要供給の法則の立場を一步押進めたるものである。之に對し他の一は指圖學説によらんとするものにして、何等個人に觸ることなき第二の類型の立場を固執し、其の基礎付けを貨幣本質觀のうちにあるものとすものである。

茲に問題となるのは第一の類型の立場は其の説明せんとする貨幣價值を前提としてゐることである。シュンペーターは「貨幣は購買力を持つ。而して其の故に其の所有者により評價される。故に貨幣の購買力を賣買當事者の貨幣並びに商品に對する主觀的評價より説明せんとするは循環である。蓋し賣買當事者の貨幣に對する評價は反射的のものである。それは既に貨幣と商品との一定の交換關係を前提としてゐる。即ちそれが説明すべき其の購買力を前提としてゐる」(註九)と非難してゐる。ウイザー及びミイゼスは此の論難に對して如何に答へたるか。彼等は之に對して貨幣價值の連結性を以つて答へる。ウイザーは之を「價格の連結性」(Preis Kontinuität)と呼ぶ。ウイザー曰く、「効用の表現に何程の貨幣量が用ひらるゝかは先驗的には決定されない。それは常に歴史的に決定される。各國民經濟は各時點に於いて貨幣價值を與へられてゐる。而して彼等は歴史的連結性の中に於て與へられたる状態から貨幣價值を更に作つて行く」(註一〇)ミイゼス曰く、「過去の客觀的交換價值は現在並びに未來に於ける貨幣評價の時に或る重要さを有するものである。即ち今日の貨幣價格は昨日並に「昨日の貨幣價格に關連し、且つ明日並に明後日の貨幣價格に相關連するものである」(註一一)「歴史的組成分子なしに貨幣價格の具體的高さを説明し得ない」(註一二)と。貨幣に對する主觀的評價は貨幣の購買力を前提しつゝ、貨幣購買力を作つて行くと言ふ此の見解によれば、主觀的貨幣價值論は第二の類型に對して基礎附けたるを得るも、此の見解にして是認せられざる時は第二の類型の基礎附けをなすことは出來ない。それは需要供給の法則の基礎附けをなし得るにとゞまる。此の場合第二の類型は其の貨幣貨物二者の必然的相等性の論據を賣買の心理を交換の心理と區別し貨幣に

對する個人的評價を否定する指圖學説により説明するの外はない。

吾人は從來數量説として一般に認めらるゝ需要供給の法則と機械的數量説との外に、前者にウイザーの所得説、後者にシュンペーターの所得説を加ふることにした。ウイザーの所得説は屢々「主觀的なる數量説」「修正せられたる數量説」と呼ばれてゐる。之を以つて數量説に加ふことは幾多議論の余地あるべきも、吾人は貨幣數量説の新たなる進路の一を示唆するものとして、敢て茲に第一の類型に加ふる次第である。

- 註一 Hoffmann, Dogmengeschichte der Geldwerttheorien. S. 6.
- 註二 Wagemann, Allgemeine Geldlehre. 1 Bd. S. 130.
- 註三 Altmann, Quantitätstheorie.—Handwörterbuch der Staatswissenschaften.
- 註四 Kirnmaier, Die Quantitätstheorie. S. 12.
- 註五 " " S. 34.
- 註六 Mill, Principles of Political Economy (London Peoples ed.) p. 298-299.
- 註七 Fisher, The purchasing power of money p. 177.
- 註八 " " p. 175.
- 註九 Schumpeter, Das Sozialprodukt und die Rechenfeniege. S. 646.
- 註一〇 Wiese, Grundriss der Sozialökonomik. S. 188.
- 註一一 Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufmittel S. 86.
- 註一二 " " S. 93.

第二節

貨幣數量説の第一の類型に屬する需要供給の法則は、一般經濟價值論に於ける需要供給の法則の貨幣に對する一適用である。そは貨幣は貨物なりとなす商品學説論者により主張されてゐる。此の限りに於ては論理的矛盾は生じない様であるが、更に一步を進めて探究する時、斯則は商品學説のうち職能價值學説と一致し、素材價值學説と一致し難きことを發見する。本節は第一に此の點を論述するものである。次に斯則の含むところの需要並びに供給の二概念につき二様の見解が存在し、其の一方を採用することにより斯則の構造は著しく第二の類型に近似し來るのである。吾人は第二に此の點を敘述せんとするものである。更に需要供給の法則が素材價值學説を抱く人々により屢々生産費説と並立し又は結合して説かれてゐるが、兩者を同時に主張するは論理上不合理にして、現に學說史的に見るも、生産費説は其の矛盾を免るゝため二様の新たなる解釋を獲得してゐる。吾人は第三に此の點を説明せんとするものである。而して吾人は此等の諸點をリカードオ及びミルを中心として説きたいと思ふ。

リカードオは「金銀は他の商品と同様に内在的價值を有し、其の價值は專恣的にではなく、其の稀少の度其の生産に要したる勞働量並びに之を産出する鑛山に投じたる資本の價值に基いて定まる」(註一)と説き、又後に之を改めて、「金銀はすべての商品と同様に、之を生産し又之を市場に持來すに必要な勞働量に比例して其の價值を持つに過ぎぬ」(註二)と説いて生産費説を抱きたると同時に、次の如く需要供給の法則を主張した。彼は主として鑄造料、紙幣に關聯して之を説いてゐる。國

家が鑄造を獨占する場合には鑄造料に制限がない。鑄貨の數量を制限することにより、想像し得る如何なる價值にでも高め得るが故である」(註三)「紙幣に對する全徵課は之を鑄造料と看做すことが出来る。紙幣は何等の内在的價值を有せざるも、其の數量を制限する事により、其の交換價值は同稱呼の鑄貨又は其の鑄貨の含有する地金と等しい。品質低下せる貨幣も亦同一原則に基く。即ち其の數量の制限により、其の現に含有する金屬量の價值に於て通用する事なく、其の法定の品位量目を具備する場合に有する價值を以て流通するであらう。不利顯鑄造の歴史に於て鑄貨は其の貶質に比例して價值の下落したることなし。これ内在價值の低下に伴ひて其の數量せざりしが故である」(註四)。「若し一國に金鑛發見せらるれば、其の通貨は流通場裡に到來する貴金屬増加の結果價值下落するであらう。——若し一國に金鑛發見に代り、英蘭銀行の如き流通要具として銀行券發行の權限を有する銀行設置され、而も商人に對する貸出、政府に對する貸付の方法により多額の發行はれ、通貨數量激増する時は鑛山の場合と同一の結果を生ずるであらう。即ち通貨の價值は下落し物價は之に準應する」(註五)「貨幣價值は全然其の絶對量に依頼するものでない。履行すべき支拂に對する其の相對的の數量に依頼するものである。同一の結果は貨幣の用途を十分の一増加すること、或は其の量を十分の一減少する事の孰れよりも生起するであらう。蓋し此の孰れの場合に於ても其の價值は十分の一丈け騰貴するが故である」(註六)。

次にミルの見解を若干の引用により窺へば次の如くである。「貨幣は貨物である。従つて其の價值は他の貨物と等しく一時的には需要供給により平均すれば生産費により決定される」(註七)「他の事情同一なれば、生産費と一致せる價值にて流通し得る量以上に貨幣が流通場裡に入る時、貨幣の價值は其の超過の繼續する限り生産費以下にとゞまり、従つて一般物價は自然率以上に維持されるであらう」(註八)「何人でも穀物獸皮或は棉等を賣却する人はそれを以て貨幣を買つてゐるのである。又何人でもパン葡萄酒布等を買入れる人はそれ等商品の販買者に向つて貨幣を賣つてゐるのである。物品購入の爲めに提供されたる貨幣は凡て販賣の爲めに提供せられたる貨幣である。故に貨幣の供給とは人々が使用せんとしてゐる貨幣量に他ならぬ。即ち人々が所持してゐる凡ての貨幣中から蓄藏されてゐるもの、少くとも將來不時の出來事の爲めに準備として保留されてゐるものを差引いた残りに外ならぬ。約言すれば貨幣の供給とは其の時々の流通貨幣である。次に貨幣の需要とは販賣の爲めに提出されたる總ての貨物より成立する」(註九)「市場に在る全貨物が貨幣に對する需要を形成すると同じく、全貨幣が物に對する需要を構成する。貨幣と貨物とは相互に交換されんが爲めに相互に探し合つてゐるのである。彼等は相互に供給となり需要となる。故に此の現象を名附けて貨物の需要供給と云つても、或は貨幣の需要供給と云つても孰れでも差支ない。兩者は同一事實を表現してゐるのである」(註一〇)「此の割合は貨幣量の増加割合と同一なることを注意せねばならぬ。即ち若し流通總量が倍増するなれば、物價は二倍に騰貴するであらう。若し單に四分の一増加するに過ぎざれば、物價も四分の一騰貴するであらう。其の場合四分の一丈け従前より貨幣増加し、其の凡てが何等かの貨物を購入する爲に使用される。若し其の増加せる貨幣供給量が凡ゆる市場に到達する時間或は流通の凡ゆる水路に行きわたる時間を經過すれば、すべての價格は四分の一騰貴

するであらう。然し物價の一般的騰貴は其の分布過程或は均衡過程より獨立してゐる。即ち分布過程不十分に於て、或る價格は多く騰貴し或は價格は少しく騰貴してゐる場合に於ても、其の平均したる騰貴は四分の一になるのである。此の事は少しも變化なき財貨量に對して四分の一だけ多くの貨幣が支出されることより生ずる必然の結果である」(註二)「先に貨幣が増加する場合を考へたが、其の代りに貨物が減少すると假定しても物價に同一の結果を生ずるであらう」(註三)故に貨幣の價値は他の條件同一なりとすれば貨幣の數量に反比例して變動する。即ち其の數量の増加は正確に同一割合にて貨幣價値を低落せしめ、其の減少は同じく正確に同一割合にて騰貴せしむるのである」(註一三)。

上述の如く貨幣に對して貨物に關する價値法則を適用せんとしたるリカード並びにミルは貨幣本質觀に於ては商品學説を抱くものであつた。實に上述の如き彼等の見解は其の貨幣本質觀の必然的所産であつた。商品學説は岐れて素材價値學説と職能價値學説となる。敢て贅言すれば、素材價値學説は金屬主義とも稱へられ、貨幣が交換手段たり價値の尺度たる爲めには夫れ自身に價値を持たねばならぬとなすものにして、クニースは經濟財の價値は貨幣即ち貨幣片によつてはなく、貨幣の價値即ち一定重量の貨幣片を含む價値量によつて測定されると論じてゐる。此の有價値なる素材即ち貴金屬を要求しやうとする基礎づけの中に金屬主義固有の規範を見出すことが出来る。之に對し職能價値學説は貨幣の價値性は其の職能即ち賣買により個人的欲望を充足し得る可能から生じる。價値を決定するものは素材ではなく職能であるとなすものである。ハインによれば貨幣にありても亦有用性と稀少性とは價値の根源にして、貨幣の有用性は直接消費或は生産に充用せらるゝ財に對し交易に充用し得る可能性のうち存し、稀少性は第一に貴金屬産出の自然的制限に、次には貨幣造出が國家的規定に従ふと云ふ事實のうち存するのである。而して素材價値學説も職能價値學説も賣買を以て交換の高次の形式に過ぎずとなし、賣買に於ける心理過程は交換のそれと何等異なるなく、與ふる財も受くる財も共に双方の當事者の評價對象をなすが故に、一括して商品學説と唱へらるゝのである。

リカード並びにミルは此の孰れに屬するか、兩者は共に素材價値學説を抱くものであつた。即ちリカードは「貨幣は常に素材自身の蒙る變動を受くるが故に絶対に不變の價値を維持するの方策はない。貴金屬の本位貨幣なる場合には、貨幣價値は其の貴金屬の價値に隨伴して必然的に變動せざるを得ない」(註一四)と説き、又或る時はマルサス宛の書翰に於て、「其の價値の決定及び其の輸出入を支配する法則に關して金地金と他の商品との間に何等大なる區別ありとは思はれない。金地金は工藝用の商品である外に弘く價値の尺度及び交換の媒介物として採用され來れるは事實なれども、其の爲めに地金が商品の目録より除外することはなかつた」(註一五)と言つてゐる。又ミルは上述の如く「貨幣は貨物である」と明言したるが、他の場所にては更に「貨幣の價値は自由状態の下に於ては永久的には其の素材たる貴金屬の價値と一致する」(註一六)と説いてゐる。

斯く彼等が素材價値學説を持する時、其の主張するところの需要供給の法則との關係如何。素材價値學説と生産費説とは其の間何等の理論的矛盾はない。貨幣の素材價値即ち貨幣價値なりとする

者が一般經濟價值論に於て生産費説を抱く時、之を素材の生産費により決定せらるゝとなすは當然の歸結である。然し素材價值學説を飽く迄守る時は、市場價格の需要供給の法則を説く時も矢張り地金銀の需要供給を論ずるものでなければならぬ。意味する所の供給の内容が地金銀にあらずして、鑄貨の數量又は鑄貨のみならず紙幣定位貨幣すらも意味するとき、其の説く所の需要供給の法則は素材價值學説とは一致せざるものである。貨幣數量説と云ふ時、其の數量は貨幣の數量なること明白にして一般地金銀の數量でない。工藝用に充當せられたる地金銀は茲には問題としてゐない。貨幣數量説の一形態たる需要供給の法則の供給とは貨幣の供給である。リカードオにせよミルにせよ貨幣價值決定の原因としては鑄貨のみならず紙幣銀行券をも含むものである。上述の如くリカードオの數量説はむしろ紙幣銀行券に就いて説かれたものである。又ミルも「紙幣手形小切手等は全然物價に作用するものでない。物價に作用するは信用にして、それが如何なる形態をとると、又其の流通性ある可讓渡的要具を生ぜしむると否とは問題でない」(註一七)と説き、物價に作用するは銀行券手形等でなくその依つて生ずる根柢たる信用であるとなすも、事實上に於ては銀行券手形小切手等の増減が物價に作用することを認むるものにして、彼は「銀行券は爲替手形よりも、手形は帳簿信用よりも物價騰貴に對して一層有力なる要具なること明白である」(註一八)と述べてゐる。銀行券、小切手等を貨幣のうちに加ふるものは勿論、信用として貨幣と同一に貨幣價值決定要素として取扱ふ需要供給の法則は素材價值學説と一致しない。

故に素材價值學説に徹底すれば、ラフリンの如く金地金價值變動は貨幣數量の變化を離れて貨幣價值を支配すと主張すべきである。ラフリンに従へば、財貨の側に變動なしとすれば、「金の側に於ては一、金の生産費の減少又は金の供給増加、二、金の供給減少又は金の生産費の増加、三、金に對する需要増加、四、金に對する需要減少」(註一九)にして、「交換要具の數量は金と財貨との間の評價の結果にして原因でない。従つて物價決定の要因たり得ない」(註二〇)のである。理論上妥當なる爲めには、素材價值論者はかゝる陳述をとるべきである。

學說史上より見るも、需要供給の法則は職能價值學説と結合せらるゝに至つた。例へばウィカーは「貨幣は交換要具である。此の職能を果すものはすべて貨幣である。貨幣が何で造られてゐるか又如何にして生誕し、繼續するかは問題でない。——貨幣の職能をなすもの即ち貨幣である」(註二一)と論じたる後、リカードオに倣つて、「貨幣の價值は他の有ゆる貨物と等しく唯需要供給の問題である。——貨幣の需要は交換を行ふに當り貨幣使用に對する機會である。そは爲さるべき仕事の量及び無數の事情により異なる。貨幣の供給は一定時の社會に於て要求せらるゝ、貨幣の仕事を行ふに使用せらるゝ貨幣の力である。——そは二要素即ち貨幣と其の流通速度より成る」(註二二)と説いてゐる。次に吾人はリカードオ及びミルに於て需要及び供給なる概念に就いて相異なる見解を見出すものである。ミルに従へば需要とは對價の同時的調達を伴ふところの商品欲求であり、供給とは對價を欲求するところの商品の調達である。貨幣經濟に於て此の對價は貨幣である。貨幣に對する需要供給は商品の需要供給とは區別され得ない。斯くて彼は「市場に在る全財貨が貨幣に對する需要を形成すると同じく、全貨幣が又財貨に對する需要を構成する。貨幣と財貨とは相互に交換されんが爲め

に採し合つてゐるのである。彼等は相互に供給となり需要となる故に此の現象を名付けて財貨の需要供給と言ふも、或は貨幣の需要供給と言ふも孰れにても差支ない。兩者は同一事實を表示するものである」(註二三)と述べたのである。然るにリカルドオは供給の場合の貨幣の調達と商品の欲求、又需要の場合の貨幣の欲求と商品の調達との概念を分離して更に貨幣の調達と欲求商品の調達と欲求との二姉妹概念を組合せたのである。フーゲマンはリカルドオの貨幣價值に對する需要供給の法則の適用は需要供給の概念が交換取引に於て持つ此の二重の意味を看過したるが故に誤謬であると論難してゐる(註二四)。

ミルの見解は其の後多くの學者の踏襲するところにして、例へばルロア・ボリューが「貨幣の價值は需要供給により決定せらる。——貨幣の供給とは一定時に於ける流通貨幣總量即ち貯藏以外の國內の貨幣總量である。貨幣に對する需要とは販賣せんとする財貨總量である。購買者は皆貨幣の販賣者であり、販賣者は皆貨幣の購買者である。——販賣の爲めの財貨總量と貯藏積立を除く貨幣總量とは互に交換される。彼等は相互に需要であり供給である」(註二五)となしたるが如き是である。而してミルの此の見解は貨物總量と貨幣總量とを對立せしむることとなり、其の構造は貨物總量と貨幣總量との相等性を前提とする第二の類型と著しく近接し來るものである。彼の流れを汲むニコルソンの如き殆んど全く第二の類型と同一の陳述をなしてゐる。「一、如何なる取引も取引毎に現に貨幣の受授なくして行はれず、例へば一の商人は二本の煙管を所有して煙草を所有せず、他の商人は數匁の煙草を所持するも煙草を所持せぬ時、一本の煙管が貨幣を使用する事なく一匁の煙草と交換せら

れぬ。即ち信用及び物々交換が全然知られぬとする。二、貨幣は交換を行はしむる以外何等の用途なしとする。従つて貯藏の爲めに停留することなく常に流通してゐる。三、貨物を一個宛所有して貨幣を所持せぬ十人の商人と、總計百個の貨幣を所持するも貨物を所持せぬ商人あり、而も此の貨幣所有者は汎ゆる貨物に對し同一評價をなすものと假定する」(註二六)「斯く設定せられたる規定に従ひ市場開かるれば、總ての貨幣は總ての貨物に對して提出され、有ゆる個々の貨物が同一なりとすれば、各貨物に與へらるゝ個片は十個なるべく、従つて物價平準は十であらう。——斯かる嚴重なる前提の下に於ては貨幣價值は正確に其の流通量に逆比例して變動す可きは明瞭である」(註二七)斯く需要供給の法則は其の觀察の態度方法の相違を除けば、其の出來上りたる構造は外見上全く第二の類型と同一である。本來の貨物に關する需要供給の法則は唯傾向を語るものにして正確なる比例的變動を主張するものにあらざるにも係らず、之を貨幣に適用したる論者が皆正確なる比例的變動を主張する所以は、彼等が個別的價格を通して又は個人に接觸して物價平準を觀察する需要供給の法則の見地を離れて、流通現象として觀察するの第二の類型の見地に立つに至れる結果である。故に個別價格を通して物價平準を説くの見地に立ち、貨物の需要供給の法則を貨幣に適用したりとなす論者が貨幣數量の變動と物價平準の變動との間に正確なる比例的關係を認むるは矛盾である。既に次にリカルドオ、ミルの如く生産費説と需要供給の法則を並唱することは論理上可能なりや。既述せるが如く、生産費説と需要供給の法則とは其の貨幣本質觀を異にするものにして此の一點よりするも同時に兩者を主張することを得ぬが、更に其の貨幣本質觀の點を離れて其の主張のみを見る

も、兩者を同時に主張するは矛盾である。若し貨幣が貴金屬の生産費に従つて一定の價值を有するなれば、財のある一定量を購買する爲めに要する貨幣の數量は貨幣の有する右の價值により決定せらるゝと言はねばならない。然るに貨幣の價值は其の數量により決定せらるゝと云ふなれば、貨幣の數量は其の價值により決定せられ、貨幣價值は其の數量により決定せらるゝと言ふ循環論法に陥るの外はない。故に貨幣數量説としその需要供給の法則を固執する限り、金生産費が直接に貨幣價值を支配するとは言へない。金生産費は金の數量を支配し、従つて貨幣數量を支配し、斯くて間接に貨幣價值を掣肘する要素なりと改めねばならない。故にミルは「洵に貨幣價值と貨幣數量との間には他の財貨と價值と其の數量との間よりも或點に於て一層密接なる關係が存在する。他の貨物の價值は條件として供給が現に變化する事なく生産費に一致する。——此の事は裝飾奢侈の爲めの貨物としその金銀に就いても亦眞理である。然るに貨幣に就いては眞理でない。——貴金屬の生産費に於ける變化は貨幣數量の増減に比例してのみ貨幣價值に作用するものである」(註三八)と説けるも、其の後の學者は殆んど皆此の見地に立ち、例へばルロア・ボリュエも亦「貨幣として使用せらるゝ貴金屬の生産費は貨幣價值に大なる影響を與ふるも、それは唯貨幣流通量の増加又は貨幣貯藏率の減少を通してのみ作用するものにして、其の影響は間接である」(註二九)と論じ、又フィリップ・ポッチも「貴金屬の生産費は貨幣の交換價值に直接の影響を及すものでない。——其は貨幣の交換價值に影響を與へずに、唯鑄貨數量に影響するものである」(註三〇)と述べてゐる。

論理上正常なる爲めには、上述の如く貴金屬生産費の影響は貨幣數量を通じて間接に貨幣價值に與ふるとなすか、又は貴金屬の生産費が直接に貨幣價值に作用し、貨幣價值が貨幣數量を決定するとなすことが出来る。前者は貨幣數量説に於ける見解、後者は生産費説に於ける見解である。其の具體的妥當性は茲に問はず、唯斯く解することによりいづれも論理的矛盾を免るゝものである。後者の代表的論者たるラフリンは「交換要具の數量は金と財貨との間の評價の結果にして原因ではない。従つて物價決定の要素ではない」(註三一)と説き、ロジャは「貴金屬の生産費が貨幣價值を決定し、此の價值が流通數量を決定する。故に生産費が貨幣數量を決定するものにして、貨幣數量が生産費及び價值を決定するものでない」(註三二)と述べてゐる。

- 註一 Ricardo, High price of Bullion, (Ricardo's works) p. 263.
 註二 " Principles of Political Economy and Taxation, p. 213.
 註三 " " " p. 213.
 註四 " " " pp. 213-214.
 註五 " High price of Bullion. p. 264.
 註六 " Proposals For An Economical and Secure Currency. p. 398.
 註七 Mill, Principles of Political Economy (London ed. 1869) p. 297.
 註八 " " " pp. 316-317.
 註九 " " " p. 298.
 註一〇 " " " p. 298.
 註一一 " " " p. 298.
 註一二 " " " p. 299.

- 註一三 " " p. 299-300.
註一四 Ricardo, Proposals For An Economical and Secure currency. p. 397.
註一五 Letters of Ricardo to Malthus (Bonar's ed.) p. 9.
註一六 Mill, Principles of Political Economy p. 311.
註一七 " " p. 318.
註一八 " " p. 322.
註一九 Laughlin, The principle of Money. p. 335.
註二〇 " " p. 362.
註二一 Walker, Political Economy. p. 123.
註二二 " " p. 128-131.
註二三 Mill, Principle of Political Economy. p. 306.
註二四 Wagemann, Allgemeine Geldlehre. Ss. 128-129.
註二五 Leroy-Beaulieu, Traite d'économie politique. p. 1.
註二六 Nicolson, Money and Monetary Problems. p. 57.
註二七 " " pp. 57-58.
註二八 Mill, Principles of Political Economy. p. 121.
註二九 Leroy-Beaulieu, Traite d'économie Politique. p. 152.
註三〇 Laughlin, Principles of Money. p. 298.
註三一 " " p. 36.
註三二 " " p. 308.

第三節

貨幣數量説の第二の類型たる機械的數量説は其の端をマーカンチリズムの時代に發するものである。當時に於ける主張者が悉くマーカンチリストには非ざるも、其の説はマーカンチリズムの影響の下に生誕したのである。

「マーカンチリズムの基礎を成せる推定は國力を以て絶対に貴金屬の永續的大蓄積に依頼すと做すものである。貴金屬は一般に需要せらるゝ所のものであり、そは財貨に對する支拂として常に受納せらるゝものであり、又富は概して貨幣の名辭に於て評價せらるゝの事實が普く認められた。而して西班牙及び葡萄牙が新大陸より金銀の潤澤なる供給を受けつゝありし間は富強なりしものと看做された。正金は特に戰爭に際して入用なるものである。而して戰爭の頻繁なりし時代に於て、平時に於ける國民的政策最高の目的は國庫及び人民の財囊中に現金を蓄積するに在りと感ぜられたことは敢て奇とす可きでない」(註一)

斯く當時に於ける當面の貨幣問題は一國に保有すべき貨幣數量の問題である。而して之に關聯して説かれたるものが貨幣數量説である。従つて此の問題自らの示唆するが如く。其の理論は一國全體として考ふるものにして、一國全體に於ける貨幣量と財貨量とを對比して其の間の關係を論ずる第二の類型を採るに至りたるは其の立脚點よりする自然の歸結であつた。後述するが如く。共同經濟を前提とする指圖學説に最善の基礎を發見する第二の類型は實に其の當初に於て團體經濟的見地の下に生誕し、成育したのであつた。

彼等が貨幣數量説のうち第二の類型を採るに至れる理由は上述の如くであるが、彼等が貨幣數量説を論ずるに至れる動因は新大陸に於ける金銀鑛の發見とマーカンチリズムの金銀貨幣誘致の政策とより惹起したる物價騰貴の現象であつた。佛國に於て千五百一年より千五百十年迄一磅十五志なりし小麥は千五百六十一年より千五百七十年間には七磅十五志となり、英國に於て千五百一年より千五百十年間の小麥は千五百九十年より千六百年間には約八倍に騰貴した(註二)。此の必然の結果として時人の注意は貨幣價值の問題に向けらるゝに至つた。然るに彼等は金銀貨幣の流入の奨勵、流出の阻礙に務めつゝありしを以て、彼等は貨幣數量の増減が物價騰貴の最大原因と信ぜざるを得なかつたのである。

固より其の當初の論者に於ては第一の類型に屬するや第二の類型に屬するやは判然せざるものにして斷片的記述に過ぎない。例へばジャン・ボーダンは「吾人の認むる高價は五個の原因より生ずる。其の主要にして殆んど唯一原因たるものは、今日當王國に於ける四百年以前の存在量よりも遙かに豊富なる金銀にして、此は從來何人も發見するに至らなかつた。——孰れの地に在りても、諸貨物を高價ならしむる主要原因はそこに評價及び價格を與ふる物件の多きことである。——伊太利に於てすら貴族が貿易を營み、又西班牙の民は他の業を營まざるの有様なれば、西班牙及び伊太利には佛蘭西よりも多量金の銀存在す。故に凡ゆる貨物は西伊二國に於ては佛國よりも、西班牙に於ては伊太利よりも其の價が高い」(註三)と論じたるに過ぎない。彼を以て貨幣數量説の先驅者とは稱し得るも、其の説く所は何等學說的體系を備ふるものではない。彼に續く數量説論者と稱せらるゝW.S.:

ライス・ヴォワソン等皆然り、幾分學說的體系を備ふるに至れるはジョン・ロック以降のことにして、ロック・ロウ・ヒューム、モンテスキュー、ハリスを以つて其の主たる論者とす。

其内ローは第一の類型に屬す可き論者、ロックヒューム、モンテスキューは第二の類型に屬す可き論者にして、ハリスは若干の矛盾を藏するも大體に於て矢張り第二の類型に加ふ可き論者である。ローは或時は地金銀に就きて需要供給を論じ、或は貨幣に就きて需要供給を論ずる。前者に徹底すれば生産費説に、後者を重視すれば數量説に入るものである。曰く、「銀は其の金屬としての用途に對し評價せられし所に隨つて交換せられ、其の交換に於ける價值に隨つて貨幣として給付せらるゝと思考するは正當である。銀の貨幣としての新用途は其の價值を増加せざるを得ない。蓋しそが貨幣として物々交換に於ける不利不便を除去し、其の結果銀の需要は増加し、斯くて貨幣用途の生める増加需要に等しき附加價值を受くるからである」(註四)「地金又は貨幣としての銀は其の供給又は需要に於ける變動より其の價值を變じる。其のいづれの場合に於ても世人は物價が騰落せりと言ふ。然し銀又は貨幣の價值が或は大或は小なるに従つて其が或は貨物の大量と或は小量と等しきなれば價值騰落せるは銀又は貨幣である」(註五)「昨年百頭の羊百クラウンにて賣却されたが今年其の販賣人が同一頭數の羊を購入し度いと思ふ。其の時に、羊の數量並びに其の需要が昨年と同一でも、銀の數量増加し而も之に應じて其の需要が増加しなければ百頭の羊は昨年より多額の貨幣と其の價值に於て等しいであらう。従つて貨幣は低廉である。貨幣數量並に其の需要昨年と同一なりとするも、羊の數量減少するか又は其の需要増加する時は、百頭の羊の價值は昨年より多額の貨幣と等しいで

あらう。従つて羊は高價である(註六)。貨幣の需要供給なる概念の有する二重の意義を看過し、貨幣に對する需要供給貨物に對する需要供給を別々に取扱へるものにして、後人リカルドオと同一の類型に屬するものである。

當時に於ける機械的數量説の鮮明なる陳述はヒューム並びにモンテスキューのそれである。先づモンテスキューの陳述を窮ふに曰く、「銀は貨物の價格である。然らば如何にして此の價格は決定せらるゝか。換言すれば銀の幾許量に依り各貨物は代表せらるゝか。全世界に於ける金銀と貨物總量とを比較すれば、あらゆる特殊の貨物は金銀全量の或る部分と比較され得る事明確である。一方の全部は他方の全部なる如く、一方の部分は他方の部分である。現世界に存する貨物單に一個なるか、若しくは購入し得る貨物唯一個のみにして而も貨幣の如く分割し得ると假定せんか、此の貨物の一部分は金銀量の一部分と相對し一方の半ばは他方の半ばに、一方の十分の一、百分の一、千分の一は他方の十分の一、百分の一、千分の一と對立するものである。然れ共人類間の貨物は總て一時に取引せらるゝものでない。故に價格は貨幣全體と貨物全體との複合割合、及び取引せらるゝ貨幣全體と取引せらるゝ貨物全體との複合割合により決定される。而して今日取引外の貨物及び貨幣も翌日は取引場裡に到來することあるべきを以て、價格決定は根本的に貨物全體の貨幣全體に對する比率に依頼するものである(註七)。「印度發見以來二十對一の比率を以て歐洲に於ける金銀増大すれば、貨物及び商品は二十對一の比率を以て騰貴するであらう。然るに他方若し貨物及び商品の分量が二對一の比率を以て増加すれば、是等の貨物は二十對一の比率にて下落したるを以て結局割合は

十對一に落着くであらう(註八)と。次にヒュームの見解を引用すれば次の如くである。曰く「汎ゆる貨物の價格は貨幣と貨物との比率に依頼し、一方に於ける顯著なる變動は價格を引上ぐるか引下ぐるかいづれかの一影響を有すること自明の理である。貨物を増加すればそれは低廉となり、貨幣を増加すれば其の價値は騰貴する。同様に他方前者の減少並びに後者の減少は夫々反對の傾向を呈する。而も物價は一國內に存する貨幣及び貨物の絶對量より市場に現れ若しくは現る可き貨物及び貨幣流通量に依頼すること明白である。若し鑄貨が函中に閉塞せらるれば、それは物價に關しては喪失したると同一である。又貨物が倉庫中に藏匿せらるれば同様の結果を生ずるであらう(註九)と。

斯く機械的數量説を懐ける彼等は如何なる貨幣本質觀を有したるか。明晰なる其の本質觀を察知することは困難なれども、彼等が貨幣を以つて財と異なるものと見たるものゝ如く、貨幣は價値の象徴、財の代表なりとの觀念を有したのである。後述の如くジンメルも價値の表彰なりと陳述してゐるが、彼は同時に貨幣職能價値學説を奉じたのであるが、當時の論者は此の點の陳述甚だ不明確なるもむしろ後世の指圖學説に近似するものであつた。故にマーカントリストの誤謬は金銀と富とを混同したるにあらずして、金銀を富の象徴とし、其の意義を餘りに過重したることである。勿論金銀即ち富なりとの思想も存在したが、これは象徴と實體との混同にして心理的には極めて陥入り易き混亂の一例である。モンテスキューは「貨幣は百般の價値を表彰する記號である(註一〇)」「アフリカ沿岸の黒人は貨幣なくして價値の象徴を有する。それは純粹觀念的な象徴にして、彼等が懐く欲望に比例して各商品に對し精神裡に於て附與する尊敬の程度を基礎とするものである。或る貨物又は

商品は三 Macutes、他のそれは六 Macutes、更に他のそれは十 Macutes に値する。それは單に三、六、十と呼稱すると同じで、價格は彼等が各商品に就いて行ふ比較により形成される。此の時特定の貨幣なるものなく、各個の商品は他の商品の貨幣である。今此の評價の方法を吾人の間に採用して吾人のそれと合するに、世界の凡ゆる貨物及び商品は一定量の Macutes に値する。而して此の國の銀を Macutes の數と等しく分割すれば、該銀分割部分は一 Macutes の象徴であらう(註一)と述べ、又ヒュームは「貨幣は本來商業の目的物の一に非ずして、單に人々が貨物相互の交換を容易ならしむるが爲めに協定したる方便に過ぎない。それは交易の車輪に非ずして、車輪の運動をして更に圓滑輕易ならしめる油である」(註二)「貨幣は正に勞働及び貨物の代表に外ならざるものにして、單に是等のものを率定し、若しくは佐料するの手段として役立つに過ぎない」(註三)と述べてゐる。故にフーゲマンはマーカンチリズムを以て貨幣觀念上の象徴主義 Symbolismus なりとなした(註四)。貨幣は表彰なりとの定義から貨幣總量と貨物總量とは相等しいと云ふ結論を引出すことは出來ない。兩者の相等性の説明は象徴主義に於ては與へられてゐない。

此の象徴主義は次第に金屬主義に壓倒せらるゝに至つたのである。既にチャルギーは「銀が一般財貨の共通尺度たるは貨物としてゝあつて記號としてゝない」(註五)と説き、又コンディヤックは「貨幣を諸財貨の價値の表彰なりとする論者は、貨幣を氣儘に選定せられたる象徴とし、發明による價値を有するのみとなすが故に甚だ不正當である。若し彼等が該金屬が貨幣たるに先ちて商品たりし事、それは現に依然として商品たる事を知れば、其が價値の尺度たるに適するは發明より離れてそれ

自身價値を有するが故なることを知るであらう」(註六)と説き、更に降つて、セイは「代表表彰は被代表物の價値だけを持つ。其の呈示ある時はその物を引渡さなければならぬ。然るに貨幣は其の用 usage あるが爲めに價値を有するのである。従つて貨幣を提示されるも何人も貨物を引渡す義務はない」。貨幣は決して貨物の價値の表彰ではなく貨幣と稱せらるゝ商品である。「人が自己の貨物を賣却する時表彰に對して交換するに非ずして、自己の賣却貨物と等價なりと考ふる貨幣なる他の貨物と交換するのである。人が貨物を買入るゝ時表彰を與ふるにあらずして、買入貨物と等しき眞實價値を有する貨幣なる他の貨物を與ふるのである。」と説き、更に貨幣を表彰なりとなす謬見から貨幣は他のすべての貨物を代表し、其の價値總計は他の全貨物の價値總計に等しく、貨幣總量の増減は貨幣一單位の價値を増減せしむると考ふるに至る。乍併貨幣總量の増減によつて其の價値が騰落するは貨幣が貨物の表彰たる關係からではなく、貨幣の供給が需要に對して變化する爲めであると論じた(註七)。

機械的數量説が再び出現するに至れるは職能價値學説なる名目主義の出現と歩調を同うするものである。吾人は職能價値論者の機械的數量説主張の代表的陳述をシンメルに於て認むるものである。機械的數量説の精鍊はむしろニホルン、フィシャー等に負ふところ大なりと雖も、貨幣價値本質觀との交渉を考究する現在の目的の爲めにはシンメルを以て最適の代表者となすことが出来る。吾人は以下可及的詳細に彼の見解を窺ひ度いと思ふ。蓋し職能價値學説と指圖學説との根本的對立はすべて經濟組織に對する見解から生れ出るのである。従つて後段に於て指圖學説の經濟組織觀を

詳述するが如く本節に於て職能價值學説の經濟組織觀を説くは決して無用のことではない。故に吾人は彼の經濟組織觀、一般經濟價值本質觀から出發して其の貨幣數量説に論入せんとするものである。

經濟に於て問題となるは形而上學的範疇としての價值にあらざして、享樂の主體と享樂の原因との間に生ずる距たりに基いて成立するところの價值である。この距りは經濟生活に於ては特有の仕事で行はれる。即ち人間と彼の欲望の對象との間に介入するところの犠牲若しくは斷念の内容は、同時に他の人間の欲望の對象となつてをり、前者は後者の欲望する何等かの所有又は享樂を斷念することにより、後者をして其の所有にかゝりしかも自己の欲望する何ものかを斷念せしめ得るのである。斯く或る價值を獲得するためには、他の價值を提供せねばならぬと言ふことより恰も物と物とが互に其の價值を規定し合ふかの如き現象を生ずる。斯くして交換に於て價值は超主觀的超個人的でありながらしかも物の客觀的性質たることなきを得るのである。其の際價值一般の普遍的根源たる自我は其の創造せるものより遙かに後退することにより後者をして自我との關係を離れて相互に其の意義を測定し得させる。其處では各瞬間に於て確定せる規定及び標準に従つて對象は循環し、其のために對象は客觀的世界を形成しつゝ、個人に對峙する。此の世界に参加するとしなひとは個人の任意なれども、参加せんとする時はかゝる客觀的規定の支持者又は實行者として参加するの外はない。洵に自働的機構によるが如くに物が其の價值を規定し合ふところの完成状態に向つて經濟は進み行く。此時主觀の欲望なり感情なりは原動力として背後に働いてゐるのである。斯くて經濟は

交換の形式を經由して評價作用の流れを導き、人間世界の一切の運動の源泉たる欲望とそれ等の運動の歸着點たる享樂の満足との中間に中間の領域を形成するのである(註一八)。斯く彼は經濟生活に於ける價值の本質を論じたる後、貨幣を定義して曰く、「貨幣は抽象的財産價值として定義される。可見的對象としての貨幣は、價值ある對象その者から抽象された經濟價值が宿つてゐる身體であつて語の音にも比較され得べきものである。語の音は勿論音聲的生理的現象なれども、それが吾人に對して有する全意義は、それにより支持さるゝ又は象徴されるところの内部的表象のうち存する。對象の經濟價值は對象の相互關係に於いて成立するとすれば、貨幣は其の關係の獨立性を取得した表現であると言ふ事が出来る。經濟關係即ち對象の可交換の中から此の關係の事實が抽出され、對象に對して概念的なる——但し可見的象徴と結合された——存在を取得することにより貨幣は抽象的財産價值を提示するに至るのである」(註一九)。洵にジッメルに従へば經濟生活に於て人は一定の價值量を賦與したる上は此の量により客觀的なる交換運動(非人格なる價值作用の相互性)に物を委ねる。斯くて基礎づけられ開始さるゝ價值方向の歸する所に貨幣の意味は熟するのである。

以上の如き對象の經濟的相對性を提示するといふ貨幣の意義はあらゆる歴史的形像と等しく、漸次に概念的純粹性に到達するものなるが、それと對應せる事柄は一切の貨物が謂はゞ一定の意味に於て貨幣であると云ふ事實の裡に觀取される。bなる對象がaなる對象と交換され得べく更に新しき持主が前者の代りに。なる對象を獲得し得る場合に於ては、bは其の限りに於て物としての性質の彼方に於て貨幣の役目を務めてゐるのである。對象が相互に交換される間は其の主觀的性質と客

觀的性質とは未分に存するが、貨幣が使用價值でなくなるに比例して、對象は貨幣ならず、又貨幣たり得ざるに至るのである(註二〇)。斯く彼は實體から作用へと向ふ貨幣の發達を説くも其は決して貨幣が無價值となることを意味するのではない。貨幣が機能に分解されるとき其の機能その物が價值を持つものであり、これによつて貨幣に副るところの價值は金屬貨幣に於ては其の以前より有する價值に添加するものであり、記號貨幣に於ては唯一の價值を成すとなすものである。斯くて彼は職能價值論者に數へらるゝのである。

彼に従へば、或る對象が吾人に對して他の對象を獲得し得させると云ふことに其の對象の價值の基礎が置かるゝに至れば、其の價值は二つの係數、即ち對象が吾人に對して齎らすものゝ内容的價值と對象が此の媒介をいとなむことの確實さにより規定さるゝに至る。而して一方の係數が低下させられたりとするも、他方の係數が高めらるゝことによつて或る限度迄全體の價值は不變たることを得るのである。貨幣に就いて見るに貨幣の可利用性の確實性の上昇につれて他の價值係數即ち内部的金屬價值が著しく低下するも、しかも全體原値は變化なきを得るのである。貨幣の機能が漸次に貨幣の實體より分離するの傾向は社會的交互作用の安定性殊に經濟界の強固性により促進せらるゝも、其の結果は貨幣價值は其の機能よりの價值が主となり、貴金屬は貴金屬として評價され、其の機能は獨立の評價を受くるに至る。此の時實體は全く第二次的地位に落ち、價值感情の彼方に存する技術的理由からしてのみ問題となるのである(註二一)。曰く、「貨幣生成が「無價值」になることゝなすは實價より作用への發達を誤解せるものである。——貨幣が機能に分解さるゝとき、其の機能その物が價值を持ち、之により貨幣に添加する價值は金屬貨幣に於ては従前よりの價值に添加し、記號貨幣に於ては唯一の價值をなすのである」(註二二)。

吾人は以上ジンメルの貨幣價值本質觀を述べたるを以つて次に彼の數量説の梗概を述べることにする。彼は次の如く論じてある。各個の貨物は處理し得べき貨物總量の特定部分なるが故に貨物總量を a と呼ぶなれば、各個の商品量は a の 1_m である。次に各個の貨物により制約される價は、貨幣總量の中のそれに對應する部分なるを以て、貨幣總量を b と呼ぶなれば各個の貨物の價格は b の 1_m である。故に a と b の大きさを知り、特定の對象が貨物總量中の幾許の部分を成すかを知るときは其の貨幣價格を知り得るし、又後者から前者を知ることとも可能である。普通人がかゝる仕方で考へないのは B 及び A の變動が容易に知覺されない爲に、 B 及び A は全然自明なるものとされ、従つて其の分母としての機能が特に意識されず、個々の場合に分子のみが人の注意を惹くことに基因する。斯く當該關係を基礎づける普遍的因素が忘却され、事實上は働くも意識的には働かざるは人間の天性の一特徴を示すものである。故に或る貨物の價值と或る貨幣量の價值と相等しと定立するのは單純なる因素の相等性を意味するにあらずして、特定の經濟圏内に於ける貨物總量を分母とする分數と同一圏内に於ける貨幣總量を分母とする分數との相等性を意味するのである。而して此の相等性が定立するのは實際的理由から貨物總量と貨幣總量との相等性が定立さるゝが故である。(註二三)。

斯く彼は機械的數量を説くと雖も、以上の陳述のみよりしては貨幣總量と貨物總量と相等性の論

據を知ることには出来ない。彼は貨幣の價值を其の職能の價值なりとし、それは素材の價值即ち一般經濟價值と同一範疇に屬し、従つて貨幣價值の原動力として個人の貨幣に對する評價作用を認むるのである。斯く貨幣價值の根底を個人の主觀的心理作用に求むる彼は貨幣總量と貨物總量との相等性なる客觀的現象の論擧をも個人經濟に於て求むるに至るは自然の經路である。而して彼は個人的主觀的考量に求めたりと信ぜらるゝのである。彼は上掲の如き論述の直後に於て次の如く説明してある。或る貨物の價格が其の貨物と貨物の全體との關係に依頼すると云ふ事實は個人經濟に於いても觀取し得られる。吾人は相當の對價を受取るに非ざれば貨幣の犠牲を提供せず、かゝる犠牲の節約は積極的利得と考へられる。而もそれが利得たるは同一の犠牲を他の機會に於て利用することが可能なるが故である。若しも他の用途なしとすれば、要求する一つの物にかへて自己の所有する貨幣全量を與へることを辭さないであらう。故に價格が相當なりと云ふは、人が其の價格を支拂つた後に、同様に欲望さるゝ他の物を買入れ得る丈毛の貨幣を適當に所有することを意味する。故に或る人が各個の貨物に對して支拂ふ貨幣が彼の全收入に比して相應である様に支出を整へんとすれば、各個の對象の爲めに支拂ふ費用が全經濟の爲めに支拂ふ費用に對する比例をして、各個の對象のもつ重要さが彼により望ましく且つ調達し得る對象の全部のもつ重要さに對する比例と相等ならしめる事が必要な譯けである。かゝる個人經濟の様式の普ねく行はれることよりして平均價格は確立されるのである。かゝる主觀的考慮の合成的結果が貨物總量と貨幣總量との割合(個人の總需要量と總貨幣所得との割合)により支配さるゝ貨物と價格との客觀的關係を發生せしむるのである(註二四)。

以上の敘述により明白なるが如く、ジンメルは彼の機械的基礎として個人の主觀的心理過程を以てするのである。此の事は彼の貨幣價值本質觀及び經濟價值本質觀よりする當然の歸結であるが、これは次節に於て述ぶるが如く多くの職價值論者の探らんとする見地である。

註一 高橋誠一郎教授「マールカントリムとアダム・スミス」(三田學會雜誌第十七卷第七號)二八六頁

註二 The tables of Sir Morton Eden and Marquis Garnier, (Mulhall, The dictionary of Statistics p. 468)

註三 Baudrillart, J. Bodin et son temps. p. 169. pp. 169-170. p. 173.

註四 Law, Money and Trade considered, with A Proposal for Supplying the Nation with Money. p. 10.

註五 " " pp. 62-63.

註六 " " pp. 63-64.

註七 Montesquieu, L'esprit deslois (Freres ed.) Tome 2. pp. 214-215.

註八 " " p. 217.

註九 Hume, Essays, Moral, Political and Literary (Green and Grose ed.) pp. 316-37

註一〇 Montesquieu, op. cit., p. 206.

註一一 " " pp. 216-217.

註一二 Hume, op. cit., p. 309.

註一三 " " p. 312.

註一四 Wagemann, Allgemeine Geldlehre. Ss. 9-17.

註一五 Condillac, "Le commerce et Gouvernement, etc." Mélanges d'Economie Politique. tome I. p. 290.

註一六 Turgot, "Reflexions sur la formation et distribution des richs." Ouvres de Turgot, tome I. p. 98.

註一七 Say, Traité d'économie Politique, pp. 278-280.

註一八 Simmel, Philosophie des Geldes, Ss. 30-46.

註一九 " " " " S. 87.

註二〇 " " " " S. 96.

註二一 " " " " Ss. 151-196.

註二二 " " " " S. 192.

註二三 " " " " Ss. 104-108.

註二四 " " " " Ss. 114-115.

第四節

前段に於て貨幣數量説の二類型を考察したる吾人は次に其の基礎づけを考究すべき順序にある。前述せるが如く貨幣本質觀に於て職能價值學説を採用する限り、其の基礎付けとしては個人の評價の心理的經過を以つてする方法に據るを以つて自然とする。素より此の問題は將來に残されたる宿題にして茲に斷案を下すことは不可能なりと雖も、其の進路を示唆するものとして

主觀的貨幣價值論者たるツヴァイディネック、ヴァザー、ヴァイス、ミゼス、アフタリオン等のうち、ツヴァイディネック及びミゼスの所説の梗概を摘記する。

ツヴァイディネックは職能價值論者である。曰く「貨幣は貨幣形態に於ては役立たないが、其の交換能力により多くの實質的價值(財)に對する要求權を與ふるものである」(註一)。「貨幣職能が一層發達して大量の貨幣が單なる中間交換財として働くことを止め、且特殊な貨幣形態をとる様になるとかくの如き獨立の貨幣形態と同時に獨立の貨幣價值が發達する。而して貨幣素材の使用形態と共に其の使用價值も亦貨幣職能に於て背後にかくれるものである」(註二)。「貨幣の交換價值は貨幣が交換に際して實質的價值と換へて交附せらるゝ限りに於て、唯交換の中に於てのみ形成せられる」(註三)と。彼は貨幣の職能を如何に解するか。彼は全ての貨幣職能は支拂手段なる名稱のうちに包含されると説く。支拂手段には對價支拂手段と讓渡支拂手段とがあるが、「讓渡支拂に於て盡す貨幣職能は交換價值に何等の影響を及し得ずして、交換價值の大きさを決定するものは對價支拂手段である」(註四)斯く職能價值學説を抱ける彼は貨幣價值の決定を貨幣素材の限界効用に求める金屬主義的見解に到達しなかつた。

彼は貨幣價值を分ちて三個の形式となした。第一は個別經濟的乃至個人的交換價值にして、貨幣單位が個別的主體に對して持ち其の所有狀態欲望狀態により異なる効用に於て、第二は國民經濟的客觀的交換價值にして貨幣單位が國民經濟に於て一般物價平準の如何に應じて示す効用に於て、第三は國氣經濟的主觀交換價值にして貨幣單位が國氣經濟に於て一般價格平準を基礎として社會の平均的欲望に對してもつ効用である(註五)。而して第一と第三との主觀的交換價值は限界効用に從ふものなれども、客觀的交換價值は直接限界効用に從はない。「客觀的貨幣價值に特有なる法則をば價值論乃至價格論は吾人に教へることは出来ない。——價格論は個々の價格が相互に立つ所の關係を吾人に教ふるも一般物價平準の絶對的高さはあらゆる個別的價格の決定に際して構成要素として共働する客觀的貨幣價值の大きさが何によりて基礎づけらるゝやを貨幣理論が闡明することにより始めて

理解されるのである」(註六)

斯くて彼は營利の組織に於て其の職能を盡す實質的價値の價格は家計に於て役立つ實質的價値の價格から導き出されると言ふのは價格論に於ける根本的命題の一となす見解を援用して、貨幣の客觀的交換價値は家計に於ける價値から受くるとなし、「貨幣理論は貨幣の客觀的交換價値の構成法則を次の如き簡單なる形態に於て把握す。即ち客觀的貨幣價値は家計の貨幣所得が之を用ひて獲得せらる所の實質的所得に對して立つ割合により決定される」(註七)と説いてゐる。茲に言ふ實質的所得とは所得の形をとれる財貨數量、貨幣所得とは所得の形をとれる貨幣數量と解することが出来る。斯く解する時は、貨幣數量説の商品總量と貨幣總量との對立を所得の形をとれる貨幣數量と消費財の數量との對立となしたのである。シュンペーターの所得説が國民經濟に於ける貨幣所得と消費財との對立を取扱ふに對し、個人の消費經濟に於ける貨幣數量と消費財との對立を取扱へるものにして、これ彼を以て主觀的なる貨幣數量説と稱する所以である。而して彼の貨幣所得なる概念は既に貨幣價値を前提となすものであるが、彼は之に答ふるに「價格の連続性」を以つてすることは既述せるが如くである。

ミーゼスも亦ウィザーと同じく職能價値學説を懐くものである。曰く、「貨幣は貨幣職能開始の瞬間に於ては貨幣職能に歸し難き貨幣職能以外の原因による客觀的交換價値を既に有することが必要である。然し貨幣が貨幣としての職能をなすや、其の交換價値の基礎たる原因が消失するも貨幣價値を保有することが出来る。此の場合貨幣價値は全然一般的交換手段としての職能により維持せらるゝものである」(註八)と。彼の貨幣價値論は此の職能價値學説と主觀的價値論との結合より生誕したのである。

貨幣に於ても其の經濟的價値判斷の根底をなすものは個人に依りてなさるゝ所の主觀的評價である。此の主觀的評價は他の財貨に於てはそが主體の福祉に對して不可缺の條件として有する重要さに歸せらるゝと同じく、主體の福祉に對して貨幣の有する重要さに歸せらるゝものである。唯一般財貨の效用は經濟的範疇以外の寧ろ技術的又は心理的なる條件に依頼するに反し、貨幣の主觀的價値は客觀的交換價値即ち購買力を前提とするものにして、交換場裡に於てそれと引換へて他の經濟財を獲得し得ることの可能性に依頼するものである。

故に市場に於ける商品と貨幣との交換關係は後の貨幣の評價に對する出發點である。「過去の客觀的交換價値は現在並に未來に於ける貨幣評價の時に或る重要さを有するものである。即ち今日の貨幣價格は昨日並に一昨日の貨幣價格に關連し、且明日並に明後日の貨幣價格に關連するものである」(註九) 斯く彼はウィザーと同じく貨幣の主觀的評價は貨幣の客觀的價値を出發點としつゝ、更に爾後の客觀的價値を作成し行くとなすものである。

然らば彼は貨幣の主觀的評價が貨幣價値を作成し行く經過を如何に説明するか。

彼は貨幣の客觀的交換價値決定は貨幣の需要の變化と存在量の變化との關係に求むべしと雖、國民經濟的なる需要並に供給の觀念、換言すれば客觀的なるものより出發するは誤謬にして、個人經濟の現象を出發點となすべきであると説く。「若し吾人にして正しき結果に到達せんとせば個々の個

人的價值評價より出發すべきである〔註一〇〕とし、貨幣數量説は全く機械的なりと非難した。國民經濟の貨幣存在量の増加は——常に多數の經濟主體の貨幣所有の増加である。此の人々に於ては貨幣需要と貨幣存在量との關係は變化する。即ち彼等は相對的には貨幣を余分に所有し、相對的には他の經濟財について不足をしてゐる状態である。此の兩事情の直接結果は、彼に對する貨幣單位の限界效用の低下である。そは市場に於ける行動に影響する。彼は一層交換可能性を増し、購買力を増すこととなり、市場に於て彼の必要とする對象物に對する需要を以前よりも一層強く表現するに違ない。彼は彼の取得せんと欲する商品に對してより多くの貨幣を提供し得るからである。其の當然の結果は其の商品の價格は騰貴し従つて貨幣の客觀的交換價值はその商品に對して下落する。然し市場に於ける價格の騰貴は新なる貨幣の最初の所有者の欲したる商品にのみ限局されて居ない。其の商品を市場に齎せる人は彼の所得の増加。即ち其の貨幣存在量の相對的増加を知り、彼に於ても再び彼の欲する商品に對して一層強き需要者として現はれ、其の結果其の商品の價格は騰貴する。斯くて價格の騰貴は漸次擴大して遂にすべての商品が強弱の差はあれ皆作用せらるゝ迄續くのである〔註一一〕。

斯く彼は限界效用説を援用し、貨幣増減の物價に及す影響を主觀主義的に説明し、從來の數量説が貨幣數量と物價水準との關係を客觀的に論ずることにより生ずる機械的説明に對し、其の經過を示すことにより基礎づけを與へたのである。貨幣數量説に主觀主義的説明を加へたるは其の是非は別として正に新生面を開拓したるものである。勿論其は既に限界效用説の一鼻祖レオン・ワル

ラスの試みたる所にして、ワルラスは「他の事情同一にして、貨幣數量増加するか又は手許所有の準備額が減少する時は、それに比例して物價は騰貴し、貨幣數量減少するか又は手許所有の準備額が増加する時は、それに比例して物價は下落するであらう。此の法則は價值は效用増大する時は増加し數量増大する時は減少するてふ原則を貨幣に適用したのである」〔註一二〕と述べてゐるが、貨幣數量説に對する基礎附けの意識的企圖は先づミイゼズに指を屈すべきであらう。

- 註一 Wieser, Geld im Handwörterbuch der Staatswissenschaften. S. 684.
 註二 " " " S. 689.
 註三 " " " S. 699.
 註四 " " " S. 699.
 註五 " " " S. 697-698.
 註六 " " " S. 998.
 註七 " " " S. 699.
 註八 Mises, Die Theorie des Geldes und Umlaufmittel. S. 88.
 註九 " " " S. 86.
 註一〇 " " " S. 123.
 註一一 " " " S. 120.
 註一二 Léon walras, Elements d'economie politique pure. p. 383.

第五節

吾人は前段諸節に於て貨幣數量説二類型の各々の貨幣本質觀との關係を考究し、素材價值學説は數量説と全然相容れざること、職能價值學説は需要供給の法則と論望上相合致すれども機械的數量説との結合に困難あること、職能價值學説論者は數量説の基礎附けとなすに多く主觀的貨幣價值論を以つてするの傾向あることを縷述した。右のうち主觀的貨幣價值論を以つて機械的數量説の基礎附けとなすには幾多の論理上の疑問がある。それにも拘らず既述せるが如く兩者の結合は多くの職能價值論者の企劃するところである。

吾人は之に對して斷定的論評を下すことは出来ないが、少くとも次の事は言ひ得る。機械的數量説の基礎附けとするに主觀的貨幣價值論を以つてすることは、機械的數量説の特徴を失はしむるものであり、従つて貨幣數量説なる名辭の存在の意義の大半を失はしむるものである。其の純客觀的な觀察方法と比例的變動の主張とは(其の正否は別として)貨幣數量説なる名辭を要求する所以である。此の點を失ふ時、貨幣數量説なる名辭を存續せしむるの必要はないであらう。

然らば數量説第二の類型は其の特徴を保持しつつ、合理的基礎附けを獲得することは可能であらうか。吾人の見解によれば指圖學説は第二の類型と最もよく一致し、前者は後者に對して基礎附けを與ふるものである。第一に機械的數量説の流通現象的觀察方法は指圖學説の共同經濟の概念並びに社會生産物の概念により論據を與へられ安定する。第二に其の全構造の土臺たる貨物總量と貨幣總量との相等關係は指圖學説の如く貨幣の本質を以つて財貨一般に對する指圖權なりと解することに

より説明することが出来る。第三に指圖學説の如く貨幣は評價の對象ならずと解することにより全然貨幣價值(貨幣の購買力)變動を客觀的に説明する見地が擁護される。シュンペーターが指圖學説と數量説とは決して相對立する二つの貨幣理論ではなく、數量説の根本觀念は單に指圖説と調和するのみならず深き基礎附けとして是非それを必要とするものなるを説けるは至當である(註一)。吾人は以下ベンデクセン、エルスターを通じて指圖學説の梗概を窺ひ、次にシュンペーターの指圖學説に基く機械的數量説(所得説)を説かんとする。

指圖學説に於ける團體經濟なる名辭は交換經濟に對立するものである。從來の經濟學は經濟の本質を決定するに當り經濟發展の初期に現れたる交換なき家族經濟の思想より出發して、其の後の發展を研究し、近世經濟の根據をも當初の交換行爲のうち求めんとする。従つて貨幣理論も亦如何にして或る財が貨幣となつたかてふ貨幣の成立、並びに貨幣の發展を説けるものである。然るに指圖學説は貨幣經濟社會なる今日の經濟社會は永き發達の過程を経て初めて成立したるには相違なきも、今日の貨幣經濟を以つて以前の交換經濟の高次の一種に外らず、賣買は單に貨幣を仲介とする交換に過ぎずとなすは發展中に於ける變化を看過したる謬見となすのである。而して彼等は第一に今日の貨幣經濟は團體經濟であることを力説するものである。ベンデクセンは之を生産團體(Produktionsgemeinschaft)及び消費團體(Konsumgemeinschaft)なる二方面から觀察した。彼に従へば今日の經濟社會の特質として普通分業と財の交易を擧ぐるも、分業とは技術的概念であり、財の交易は附隨的なることにして、従つて之等を以つて最も顯著なる特質となすことは出来ない。生産の方面で

は、今日各人は自己の欲望を問はず専ら他人のそれを目標とし、恰も凡ての人が凡ての人の爲に働くの趣を呈し、消費の方面に於ては凡ての人が凡ての人の奉仕を欲求してゐる。換言すれば共同體の爲の生産、共同體を通じての消費之が貨幣經濟の特徴である(註二)。次にエルスターに従へば、今日の經濟は生産消費の方面に於て共同體をなすのみならず、支拂の上に於ても亦自ら共同體をなすものである。共同體が共同體の爲に生産し、共同體が共同的生産物を消費する時之を共同體の各員に分配しなければならぬ。生産及び消費共同體は自ら分配共同體と相伴ふべきも、分配共同體は必しも支拂共同體たるを要しない。氏族共產主義的又は社會主義的共同體に於ける分配の如きしかるも、支拂によりて分配を統制する所に今日の貨幣經濟の特徴が存するのである(註三)。

彼は更に其の對象たる社會生産物に就き次の如く説く。社會生産物とは貨幣經濟として共同經濟に於てそれに特有なる分配過程を形成しつゝ流通しつゝあるものゝ總體である。それは又消費資源とも呼ばれる。これを社會生産物と呼ぶは其等の流通財が人類全體により人類全體の爲めに調達せられ、貨幣と引換に引渡さるゝと云ふ事實に着眼したる場合であり、消費資源と呼ぶは其の流通財が經濟生活の需要の目的物となり、これを消費せんと欲する人々は其の提供者から貨幣と引換に受取り得ると言ふ事實に着眼したる場合である。故に團體經濟的の分配流通過程に於て其の對象となり得る凡てのものは例外なく社會生産物に屬すべきものであり、又消費資源を形造るものである。(註四) 以上の指圖學說の前提をなす二つの概念は機械的數量説の經濟社會に於ける流通過程を全體として俯瞰的に觀察するの態度に對して説明を與ふるものにして、之によりて其の見地は論據を獲

得するであらう。

次に貨物總量に對して貨幣總量が相等の關係に立つの理も指圖學說の貨幣本質觀により説明し得るであらう。エルスターは貨幣の本質として、一、社會生産物に對する參加可能性、第二、社會生産物に對する參加手段、第四、社會生産物に對する參加測度なる三個の概念を説いてゐる(註五)。第一の概念は貨幣の抽象的概念とも稱すべきものでエルスターの貨幣觀の中心をなし、社會生産物に對する參加可能性は共同體から其の組成員に彼が社會生産物の構成に寄與したるに對して與へらるゝ報酬である(註六) 而して第二の概念は又支拂手段とも概念される。支拂とはエルスターにとりては社會的生產物に對する參加可能性を移轉することであり。參加手段又は支拂手段とは「社會的生產物に對する參加可能性を移轉する爲めに用ひらるゝ對象」である、而して社會的生產物に對する有ゆる參加可能性はそれを確保する手段と結合するに非ざれば現象の上に出でない。他方社會的生產物に參加する手段は此の參加に對する可能性をそれ自らの内に抱合し、從つて手段と共に可能性は成立し消滅する。故に一方の存在は常に他方の存在を制約し、經濟的事實の地上の世界に於ては兩概念は同一のものなる如く相互に區別なく使用される。斯く解する時、一國に於ける貨幣總量は社會生産物に對する參加手段の總量にして、從つて社會生産物總量と相等關係に立つものである。而して社會的生產物は流通過程にある商品總量であること見らるゝ故に、一國に於ける貨物總量と相等しと斷定することが出来る。

次にエルスターに従へば自己經濟は(主觀的)價值或は効用費用を支配するに對して、共同經濟は

(客觀的)數或は價格を支配する。價值、効用、費用等の諸概念は前者を理解するに足れども、共同經濟を説明することは出来ない。蓋し主觀的感覺としての價值より、客觀的數的表現としての價格に導くべき橋梁は全く存在しないからである(註七)。經濟學の通説は貨幣經濟を以つて交換經濟なりと考へ、貨幣を以て一の交換財なりと考ふる故に、交換理論は賣買、即ち商品對貨幣の交換に際しても適用せらるゝものと考へる。然し當事者の心理的過程は交換の場合と賣買の場合とに於て全然相異なるものである。交換に際して當事者の評價作用の行はるゝ範圍は左の通りである。

- 一、他の財の獲得の目的を以て提供せらるゝ財の使用價値の評價。
 - 二、獲得せんと欲する財の使用價値の評價。
 - 三、其の欲する財を獲得する爲に提供し得べき凡ゆる他の財の使用價値の評價。
 - 四、其の欲する財の代りとして或は獲得すべきかと考へらるゝ凡ゆる他の財の使用價値の評價。
- 然るに賣買に際して買手が其の提供すべき貨幣に關して考ふるところを見るに其は

- 一、其の欲する財を更に少き貨幣額を以て獲得し得るか否か。
- 二、其の同じ貨幣額を以て更に高く評價さるべき他の財を獲得し得るか否か。

の範圍を超えざるものである。交換の場合に於ける第一の考慮は賣買の際には全く存在せず、唯客觀的なる計算單位の數的關係があるのみである。故に貨幣は商品と同一の意味に於て使用價値評價の目的物となり得ないのである(註八)。指圖學説に従へば貨幣購買力の變動の理法を主觀的なる個人的評價作用から説くことはなし得ざることである。故にベンデクセンは「貨幣を理解するに價値理論は無用である」(註九)と言つてゐる。此の點よりするも權械的數量説は指圖學説と結合せらるべき學説なりと言ふことが出来る。

指圖學説論者にして機械的數量説を説ける者はシェンペーターである。彼の議論は幾多の疑點を藏すべしと雖も、(エルスターは之に對して全然無價値なりと酷評を下してゐる)吾人は一々それを批判することなく指圖學説の基礎に立つ數量説の適例として其の梗概を略述したいと思ふ。彼は「貨幣價値とは所得一單位の購買力——それは交換價値でもなく、又使用價値にも基かない——に外ならぬ」貨幣價値の問題は結局購買力の問題であり、購買力の問題は個々の商品の貨幣價格の問題にすぎない。而して商品の貨幣價格の反射價値が所得一單位が個々商品に對する購買力である(註一〇)。となし、斯くて彼はフィッシャーやケメラリと同じく數學式を用ひて之を説いた。彼は之を貨幣理論基本方程式 Die Grundgleichung der Geldtheorie と命名してゐる。其の方程式とは

$$E = M \times U = p_1 + p_2 m_2 + p_3 m_3 + \dots + p_n m_n$$

にして、Eは一經濟年度内に於ける一國民經濟内の總ての經濟主體の所得(國家其の他の公共團體の歳入にして私的營利の目的に利用せられざるものを含む)、Uは流通貨幣量、Uは平均流通速度、 m_1 m_2 m_3 等は各個の消費財並に使用財の量(使用財にして一經濟年度以上に亘つて使用し得るものは毎年新たに製造せらるゝ普通量)、 P_1 P_2 P_3 は是等消費財及び使用財の價格を意味する(註一一)。

Eとは一經濟期間内に經濟主體が所得する高を貨幣にて表示したる總額にして、貯蓄額又は租稅給付額を包含せしめず、之に對して消費支出を目的とする借入金及び資本部分を包含せしむるもの、

即ち單に消費せられたる財の貨幣にて表示せられたる額を意味する(註一二)。斯くて彼は「靜態的均衡の状態では總ての生産財の價格の總額は總ての生産財の價格の總額に等しく又兩者は總ての貨幣所得額に等し」と言つてゐる。Wとは彼に従へば、一、事實上貨幣として流通する商品、二、貨幣としての購買力が其の貨幣素材の市價より大なる貨幣、三、銀行券、四、小切手及振替資金、五、所得の支出にして相殺によりてのみ決済せらるゝ支拂總額、六、實際に貨幣の機能を充たす各種の信用證券及び債權にして(註一三)、一、死藏せられたる額、二、他の種類の貨幣を發行する基礎となり一時的蓄藏せらるゝ額、三、支出に充てらるべくして未だ使用せられざる額、四、銀行又は個人の現金準備額を除外するものである(註一四)約言すれば貨幣は流通、貯藏、及び資本の三領域に分布せらるゝも、流通界にあるものゝみを基本方程式はWとなすものである。Uに就いて彼は「フィッシャー其の他の數量説論者が與ふる定義即ち一定期間に貨幣單位が所有者を替ゆる平均度數又は貨幣單位が一定期内に同一所有者の掌中に止まる平均殘留期間を斥けて、經濟過程の經る一期に同一貨幣單位が消費界へ復歸する度數、又は同一のことを意味するのであるが貨幣所得の要素を取得する度數なりとした(註一五)。

斯くて彼は此の基本方程式より次の三命題を抽出したのである。

第一命題、「積の和を成す商品量と商品價格の大きさに生ずる變化は積の和自身、即ち $p_{m_1} + p_{m_2} + \dots + p_{m_n}$ に直接の影響を與ふる事は出來ない。」此の意味は「若し $M \times U$ が不變なる限り商品價格と商品量との變化は他の商品價格と商品量の變化によりて平均される」即ち「所得總額不變の場合には、經濟主體が其の所得の中或る商品に對し從來よりも多額を支出するか或は少額を支出する時は、殘存商品の價格と又結局に於ては殘存商品の量とは自ら變化して其の過剩部分吸収し盡され、又は其の不足部分が補はるゝに至る」となすのである(註一六)。

第二命題、「方程式の左項に生ずる變化は——即ち貨幣の原因による總ての影響は常に直接 $M \times U$ に影響を生じ、而して $M \times U$ に生ずるすべての變化は之に相應する右項の積の和に變化を生ずべきものである」。一般には貨幣量の増減が流通速度の増減を惹起して其の積が平均されることなく、兩者は獨立してゐる。故にM又はUに於ける變化は必然に $p_{m_1} + p_{m_2} + p_{m_3} + \dots + p_{m_n}$ に變化を與ふる原因となり、しかも積の和は其自身決して $M \times U$ の變化の原因とはならないとなすのである(註一七)。

第三命題、個々の商品又は總ての價格又は量の變化は直接に積の和に影響する事能はざるも、其の變化は貨幣量に影響を與ふる事が出来る。而して次に貨幣量の變化は次に積の和に影響を與ふるものである。しかし個々の商品量及び商品價格の變化が貨幣量に及ぼす影響は多くの場合に必然的に又自働的に生ずるもので、又或る場合には貨幣創造の刺戟をなすのみである事もある。其のいづれの場合たるを問はず、貨幣量は貨幣以外より生ずる原因に受働的に順應するものなりと言ひ、又 $M \times U$ の眞の決定原因は商品の側にあつて貨幣量が一般物價の變動又は積の和の變動の獨立原因たらずと言ふ事は出來ない(註一八)。

以上の命題は幾多の議論の余地を存し、又何等特に新奇の議論となすことを得ない。吾人が彼に

於て認むべきは彼の此の三命題にあらずして、彼の貨幣理論基本方程式を指圖學説の基礎の上に建立したる點に存する。彼によりて開かれたる這般の路は機械的數量説の進み行く可き路を啓示したるものなりと言ふことが出来る。

之を以て本稿の考究は終る。吾人は比較的閑却せられたる貨幣數量説の基礎附けとなるべき理論を採求し、貨幣數量説をして新たな土臺の上に打建てんとした。其の結果貨幣本質觀に於て職能價值學説を採用して主觀的貨幣價值論を以て基礎附くるか、又は指圖學説を以つて基礎附くるかの二途あるを認めた。いづれを採るべきか。これ最後に答ふ可きところなれども、吾人は本稿に於ては唯其の進路を示唆するにとどめ、そは更に筆硯を新にして論せんと欲するものである。

註一 Schumpeter, Sozialprodukt und die Rechenpfennige, Ss. 648-649.

註二 Bendixen, Wesen des Geldes, S. 24.

註三 Elster, Seele des Geldes, Ss. 12-16, Ss. 37-42.

註四 " " " S. 98.

註五 " " " S. 28.

註六 " " " S. 46.

註七 " " " S. 18.

註八 " " " Ss. 18-21.

註九 Bendixen, Währungspolitik und Geldtheorien im Sichte Weltkriegs, S. 137.

註一〇 Schumpeter, Sozialprodukt und die Rechenpfennige, S. 651.

註一一 " " " S. 675.

註一二 " " " S. 635.

註一三 " " " Ss. 655-662.

註一四 " " " S. 666.

註一五 " " " S. 671.

註一六 " " " S. 678.

註一七 " " " Ss. 684-696.

註一八 " " " Ss. 697-700.